

## 民間レクリエーション団体会員の 継続意欲に関する研究

—子ども劇場・おやこ劇場のケーススタディー—

○赤堀 方哉（神戸大学大学院） 山口 泰雄（神戸大学発達科学部）

### 【目的】

レクリエーションとは「自由時間に自発的に行われ、社会的にも意義のある活動である」と一般的に定義される。レクリエーション活動は近年の余暇時間の増加に伴い、ますます多様化の様相を示している。これらの活動の一翼を担っているのが民間非営利のレクリエーション団体である。民間非営利のレクリエーション団体はその存続を会員数の維持によっている。しかし、現実には会員数の維持が思うようになっていないというのも現実である。そこで、これらの団体の会員の継続意欲を高める方策が緊急に求められているのである。

そこで本研究では全国的な規模を持つ民間レクリエーション団体である子ども劇場おやこ劇場を対象にして、会員の継続意欲を構成する要因について明らかにすることを目的としている。

継続意欲に関する先行研究にはスポーツイベントのボランティアを対象にし、活動満足と継続意欲の関連を初参加者と活動継続者において比較を行った綿ら(1989)<sup>1)</sup>の研究や、ボランティア活動の継続意欲を説明する因果関係モデルを設定し、パス解析によってモデルの妥当性を実証した山口ら(1989)<sup>2)</sup>の研究がある。また、「指宿・菜の花マラソン大会」のボランティアを対象にした長ヶ原ら(1991)<sup>3)</sup>の研究報告では、個人のボランティア動機は社会的ボランティア動機よりも継続意欲に対して強い規定力を持っていること、年齢が高くボランティア経験の豊富なものほど継続意欲が高くなるということ、その一方で若年層や初参加者の継続意欲が低いということを明らかにしている。

民間スポーツクラブ会員を対象に行った原田ら(1990)<sup>4)</sup>の研究報告によれば、長期間クラブ会員を継続している人とそうでない人を比較すると、継続会員は退会者よりも年齢が高く、自己の健康管理に熱心で、目的意識や意志の強い傾向にあり、退会者よりも満足度が高い。逆に、退会者は継続会員よりも若く、流行に敏感で、物事に対して飽きやすく、意思決定時に他人の意見に影響されやすい傾向にある。企業フィットネスプログラムへの参加者を対象にした山口ら(1989)<sup>5)</sup>の研究報告によれば、既婚者のプログラム参加には家族の支持が影響しており、それは特に36歳以下の若い既婚者に顕著である。また、スポーツ参加者は職場における同僚とのコミュニケーションが高いが、地位の高い既婚者では普段のコミュニケーションの少なさの代償をスポーツ活動に求めていることが分かっている。

スポーツイベント参加者によるイベント評価に関する調査研究は非常に多い。全国スポーツ・レクリエーション祭を対象にした山口ら(1991)の研究<sup>6)</sup>、全国健康福祉祭に関する山口らの(1990)研究<sup>7)</sup>、マラソンイベントのに関する野川ら(1991)の研究<sup>8)</sup>、ウォーキングイベントに関する天野ら(1993)<sup>9)</sup>、山口ら(1993)の研究<sup>10)</sup>などがある。「92'長崎県スポーツ・レクリエーション祭」と「92'スポーツフェスタ・ふくおか」を対象とした野川ら(1992)の研究<sup>11)</sup>によると、加齢が進むにつれてイベント運営に対する評価が高くなる、イベント運営に対する評価と将来のイベントへの参加継続意欲の間には正の相関がある、イベント参加の継続意欲を規定する要因は年齢によって異なる、ということを報告している。この報告の前2項は山口らの知見<sup>12)</sup>である「イベントへの評価が高いほど参加継続意欲が高い」ことを支持している。

以上の先行研究をふまえて以下の仮説を設定する。

- 仮説1：市町村人口サイズが大きいほど会員の人口比が低い。
- 仮説2：都市部と農村部ではプログラムに対する参加頻度・評価が異なる。
- 仮説3：会員歴が長いほど継続意欲が高い。
- 仮説4：子どものプログラムへの参加頻度が高いほど継続意欲が高い。
- 仮説5：プログラムへの参加頻度が高いほど継続意欲が高い。
- 仮説6：プログラムへの満足度が高いほど継続意欲が高い。

### 【方法】

対象：調査対象は、兵庫県の宝塚ふぁみりい劇場、西宮子ども劇場、多可おやこ劇場、ひかみおやこ劇場の4劇場の会員である。母集団である各劇場の会員数は表1に示す通りである。調査対象とする劇場については、本研究の目的が、市町村人口レベルと会員の人口比の別による傾向やパターンを明らかにすることであるため、兵庫県内から都市部と農村部、高人口比地域と低人口比地域を選び出し調査対象とした。調査のサンプルは、各劇場とも地域・属性がないように成人女性200人を抽出し、対象とした。表2は調査用

紙の回収状況を示したものである。

表1. 劇場別会員数と人口比

	会員数	都市人口	人口比
宝塚	1,001	203,095	0.005
西宮	521	398,692	0.001
多可	690	11,880	0.058
ひかみ	652	19,358	0.034
合計	2,864	633,025	0.005

表2. 調査対象標本数

劇場名	調査対象標本数		
	配布数	有効回収数 (率)	
宝塚	N 200	93 (0.465)	
西宮	N 200	51 (0.255)	
多可	N 200	139 (0.695)	
ひかみ	N 200	66 (0.33)	
合計	N 800	349 (0.436)	

調査内容：本研究で用いる調査項目については別表に示すように、対象者の属性（4項目）、本人のプログラムへの参加頻度（7項目）、子どものプログラムへの参加頻度（7項目）、本人のプログラムに対する満足度（7項目）、例会のイメージ（9項目）、人間関係（6項目）、劇場への期待（10項目）、その満足度（10項目）、継続意欲（2項目）及び自由記述の、計63項目である。

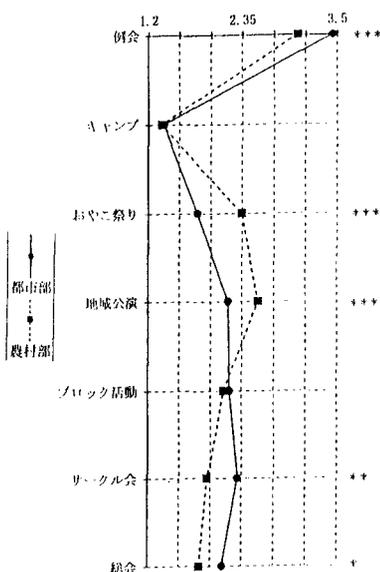
参加頻度、満足度、期待、継続意欲の各質問項目への応答は、4段階尺度によって形成されている。尺度に使われたワーディングは別表に示すように、参加頻度には「必ず参加する」、「よく参加する」、「たまに参加する」、「参加したことがない」を用い、満足度には「満足している」、「やや満足している」、「やや満足していない」、「満足していない」を用い、期待には「非常にあてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」を用い、継続意欲には「非常にそう思う」、「そう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」を用いた。イメージ・人間関係にはSD尺度によって調査された。

分析方法：仮説の検証については、従属変数である「継続意欲」は、独立変数である「満足度」「参加頻度」などの諸条件により、なんらかの傾向やパターンを示すものと考えられる。そこでこれを仮説とする。各質問項目については評定順に4,3,2,1の得点を与え間隔尺度を構成するものと仮定して数量化した。仮説の検証には、 $\chi^2$ 検定、ピアソンの相関積率係数、t検定を適用することとする。

本研究におけるデータ加工、及び統計処理は、統計パッケージ（SPSS/PC）をNEC PC-9801上で行った。

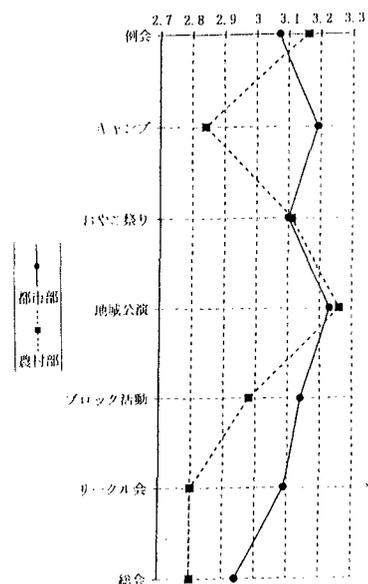
【結果】

劇場事務局が存在する市町村の人口とその劇場の人口比でピアソンの相関積率係数をとった結果、0.1%水準で有意差を示した。劇場事務局が所在する市町村は570であり、劇場会員の人口比の全国平均は0.91%



注：\* p<0.05 \*\* p<0.01 \*\*\* p<0.001

図1. 都市部と農村部の会員のプログラムへの参加頻度の比較



注：\* p<0.05 \*\* p<0.01 \*\*\* p<0.001

図2. 都市部と農村部の会員のプログラムに対する評価の比較

であった(表3)。このことから、市町村の人口が多いほど人口比は低い傾向にあると考えられる。これは仮説1を支持している。4つの地域を都市部(宝塚・西宮)と農村部(多可・ひかみ)の2つのカテゴリーに分類し、劇場内の主要プログラムへの参加頻度及びその評価の平均値を算出、t検定を行った。その結果が図1、図2である。プログラムへの参加頻度(図1)では例会への参加頻度・サークル会への参加頻度・総会への参加頻度では大都市が上回り、例会では0.1%水準で、サークル会では1%水準で、総会では5%水準で有意差を示した。逆に、おやこ祭りへの参加頻度・地域公演への参加頻度では小都市が上回り、ともに0.1%水準で有意差を示した。プログラムに対する評価(図2)では、キャンプに対する評価とサークル会に対する評価で大都市の方が高く5%水準で有意差を示した。その他のプログラムに対する評価は両地域とも同程度であった。これは仮説2を部分的に支持するものである。

表3. 市町村人口サイズと人口比の相関係数

劇場所在市町村数	570
人口比全国平均	0.91%
相関係数	-0.27
有意水準	p<0.001

会員歴と継続意欲及び継続予定期間でピアソンの相関積率係数をとった結果、継続意欲とは負の相関を持ち5%水準で有意差を示した。仮説3は支持されなかった。仮説が支持されなかった要因として、劇場活動が子供を中心とした活動であるので子供の年齢が大きく継続意欲に関与しているからであると推測される。つまり、子供が児童劇対象年齢を超えると、また、中学生になり子供が忙しくなると子供とともに退会するので、年齢が上がるにつれて、また、会員歴が上がるにつれて継続意欲が減少していくということが考えられる。それでは、こども劇場おやこ劇場会員には、会員歴が高くなるにつれて劇場に帰属意識を強く継続意欲が高まるということはないのであろうか。

表4. 会員歴と継続意欲の相関係数1

継続意欲	-0.11 *
サンプル数	(328)

注:\* p<0.05

そこで、会員歴が「5年以上の人」・「7年以上の人」・「10年以上の人」でそれぞれ会員歴と継続意欲でピアソンの相関積率係数をとった。その結果が表5である。有意差はないものの、継続意欲では会員歴7年以上ののから正の相関に変化している。仮説は棄却されたものの、興味深い結果が明らかとなった。すなわち、会員歴の浅いものは「子どもが何歳になったら退会しよう」という具体的な退会のイメージを持っているため、会員歴が上がるにつれてその時期が近づき、継続意欲は下がっていく。これは、活動の中心しかし、長い会員歴の中で劇場に帰属意識を得たものは、子どもの年齢にかかわらず劇場活動を続けていく傾向にある。これは、活動の中心が子どもから本人へと移ってきたことによると考えられる。

表5. 会員歴と継続意欲の相関係数2

<5年以上>	
継続意欲	-0.02
(サンプル数)	(145)
<7年以上>	
継続意欲	0.09
(サンプル数)	(77)
<10年以上>	
継続意欲	0.22
(サンプル数)	(21)

劇場活動における重要な他者である子どもの劇場内の主要な活動参加頻度と継続意欲でピアソンの相関積率係数をとった。その結果が表6である。例会への参加頻度では0.1%水準で有意差を示し、ブロック活動の参加頻度と総会の参加頻度では5%水準で有意差を示した。その他の項目では有意差を示さなかったが、劇場活動の中心である例会への参加頻度と強い正の相関を示したことから、仮説4は大部分では支持されたといえる。

表6. 子どものプログラム参加頻度と継続意欲の相関係数

劇場内の主要なプログラムへの参加頻度と継続意欲でピアソンの相関積率係数をとった。その結果が表6である。例会への参加頻度で0.1%水準で有意差を示し、地域公演の参加頻度で1%水準で有意差を示し、ブロック活動では5%水準で有意差を示した。おやこ祭り・サークル会・総会では有意差を示さなかった。キャンプでは負の相関を持ち、5%水準で有意差を示した。キャンプの参加頻度で負の相関を持ったのは、キャンプへの参加頻度が非常に低いことによると考えられる。仮説5は部分的に棄却されたが、例会への参加頻度や地域公演の参加頻度で有意差を示したことから、大枠では支持されたと言える。

表6. 子どものプログラム参加頻度と継続意欲の相関係数

	例会	キャンプ	おやこ祭り	地域公演	ブロック活動	サークル会	総会
相関係数	0.28	0.05	0.05	0.08	0.11	0.00	0.10
サンプル数	332	318	319	319	306	308	311
有意水準	p<0.001	N.S.	N.S.	N.S.	p<0.05	N.S.	p<0.05

劇場内の主要なプログラムへの参加頻度と継続意欲でピアソンの相関積率係数をとった。その結果が表6である。例会への参加頻度で0.1%水準で有意差を示し、地域公演の参加頻度で1%水準で有意差を示し、ブロック活動では5%水準で有意差を示した。おやこ祭り・サークル会・総会では有意差を示さなかった。キャンプでは負の相関を持ち、5%水準で有意差を示した。キャンプの参加頻度で負の相関を持ったのは、キャンプへの参加頻度が非常に低いことによると考えられる。仮説5は部分的に棄却されたが、例会への参加頻度や地域公演の参加頻度で有意差を示したことから、大枠では支持されたと言える。

表7. 本人のプログラムへの参加頻度と継続意欲の相関係数

	例会	キャンプ	おやこ祭り	地域公演	ブロック活動	サークル会	総会
相関係数	0.33	-0.11	0.05	0.14	0.11	0.08	0.08
サンプル数	338	328	322	321	318	312	323
有意水準	p<0.001	p<0.05	N. S.	p<0.01	p<0.05	N. S.	p<0.05

劇場内の主要なプログラムに対する評価と継続意欲でピアソンの相関積率係数をとった。その結果が表8である。例会に対する満足度・地域公演に対する満足度とは0.1%水準で有意差を示し、キャンプに対する満足度・おやこ祭りに対する満足度・ブロック活動に対する満足度・サークル会に対する満足度では1%水準で有意差を示し、総会に対する満足度とは5%水準で有意差を示した。この結果から、仮説6は支持され、満足度が高いほど継続意欲は高まるということが言える。

表8. 本人のプログラムに対する評価と継続意欲の相関係数

	例会	キャンプ	おやこ祭り	地域公演	ブロック活動	サークル会	総会
相関係数	0.33	0.26	0.17	0.22	0.18	0.19	0.12
サンプル数	311	128	208	240	217	198	194
有意水準	p<0.001	p<0.01	p<0.01	p<0.001	p<0.01	p<0.01	p<0.05

## 【まとめ】

本研究では、劇場会員の継続意欲と会員歴は負の相関にあった。これは、会員歴の浅い会員は自分のための活動ではなく、子どものための活動と劇場活動を位置づけているからであり、会員歴が一定以上長いものは、劇場活動を自分のための活動と位置づけ直し継続意欲を高めていると推察される。この推察が正しいならば、子どものための活動から自分のための活動へと価値観を転化させる要因は何であるのか、また、どのように変化していくのか、ということが大きな研究課題として残った。

本研究では、小都市と大都市では劇場活動に対する評価は大卒において大都市の方が高く、継続意欲も大都市の方が高かった。しかし、大都市の劇場会員の人口比は小都市に比べて格段に低いのが現状である。このギャップを生み出しているものは何であるのか、ということが研究課題として残った。

## 参考文献

- 1) 綿祐二、野川春夫、山口泰雄、菊池秀夫：スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲に関する研究—満足度が継続意欲に及ぼす影響について—、レクリエーション研究、pp. 48-49、1989
- 2) 山口泰雄、菊池秀夫、野川春夫：スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析、日本体育学会第40回大会号A、p 158、1989
- 3) 長ヶ原、山口泰雄、野川春夫、菊池秀夫：スポーツイベントのマネジメントに関する研究—ボランティアの継続意欲の視点から—、鹿屋体育大学研究紀要第6号、pp. 69-75
- 4) 原田宗彦、菊池秀夫、長積仁：商業スポーツ施設における会員の継続と離脱に関する研究—特に会員のマネジメントの視点より—、日本体育学会第41回号、1990
- 5) 山口泰雄：第3回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者調査報告書。平成2年度文部省科学研究費（一般研究C）研究成果報告書。神戸大学、1991.
- 6) 山口泰雄、野川春夫、菊池秀夫、池田勝：生涯スポーツイベントの参加者研究—ねんりんピックの事例から—、日本体育学会第41回大会号A
- 7) 野川春夫、菊池秀夫、山口泰雄、長ヶ原誠：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(1)—イベント参加者の視点から—、鹿屋体育大学研究紀要Vol. 6 pp. 57-68、1991.
- 8) 天野郡寿、山口泰雄、神吉賢一、岡田明：ウォーキングイベントの参加者研究(2)—ウォーカーの期待と満足—、体育・スポーツ科学2 pp. 17-24、1993
- 9) 山口泰雄、神吉賢一、天野郡寿、岡田明：ウォーキングイベントの参加者研究(3)—リピーターの特性—、日本体育学会第43回大会号A、p. 172、1992.
- 10) 野川春夫、萩祐美子、国本明德、松本耕二：生涯スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)—イベント運営評価と継続意欲の関連について—、鹿屋体育大学研究紀要Vol. 10pp11-23.
- 11) 山口泰雄：リピーターの継続要因を探る。体育科教育Vol. 41pp. 58-61、1994.